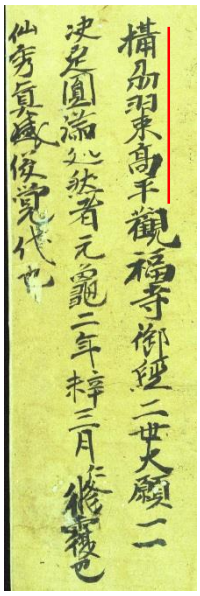
晩秋の月に中世をしのぶ

「秋はつる　はつかの山のさびしきに　有明の月を誰とみるらむ」

作者は平安時代の学者大江匡房（おおえのまさふさ）で「新古今和歌集」に収録されています。前段の「秋果（は）つるはつか」は旧暦10月20日。新暦では今年の11月１日です。月の出は21時30分過ぎ、入りは翌２日の11時30分過ぎです。したがって２日午前６時20分前後の日の出の時点では月はまだ高い位置にあり、これが「有明の月」です。また「はつか」は羽束に掛けてあり、冬も近い晩秋の風情を、夜明けの羽束の山の風景になぞらえています。「一抹の寂しさを感じる羽束の山の晩秋。有明の月をあなたは誰とみているのでしょうか」といった意味です。



摂州羽束高平とある元亀２(１５７１)年の書付

古代の羽束は、矢羽根を製作する特殊技術者の居住地と考えられています。戦国時代ごろまで羽束郡や羽束高平といった表記が上槻瀬（かみつきせ）や川原（かわら）に関係する資料上にみえ、現在の高平地区に関係する地名であることは確実です。しかしその後、羽束は高平とともに地域が特定しにくい地名となりました。

中世の高平地区に関係して多田荘（ただのしょう）という荘園がありました。源氏ゆかりの多田院（ただいん）（現在の川西市多田神社）が支配し、現在の猪名川町域を中心に３市１町にまたがる広大な荘園でした。その西端が高平地区で、上槻瀬から木器（こうづき）にかけての地域は、遅くとも室町時代初期までには多田荘に属したことが確認できます。

一方で平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇家と関わりの深い高平荘（たかひらのしょう）という荘園がありました。多田荘の北隣にあたる下里（しもさと）から布木（ふき）にかけての地域が中心だと考えられます。この高平荘は、鎌倉時代には一部が多田院に寄付されるなどして、早くから多田荘の影響下にあったようです。

古代に羽束と呼ばれた地域は、高平荘などいくつかの荘園に分かれたあと、源氏の流れをくむ武士の時代の到来とともに勢力を延ばした多田荘に覆われていったのです。歌人がめでた晩秋の月に激動の中世がしのばれます。

生涯学習支援課 市史編さん担当